

---

# 雷氷の悪魔祓い

ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雷氷の悪魔祓い

### 【Zコード】

N7417Z

### 【作者名】

ハル

### 【あらすじ】

非日常を望んでいた高校一年生の高橋雷斗は、夜中に謎の女の子の氷華に出会い、悪魔と契約させられてしまう。氷華に振り回されながらも、悪魔祓いと青春の学生生活の両立を目指して頑張る話です。予定ではファンタジーと学園の複合型のようなものをを目指します。最後に、文章が下手くそで読みにくいかもせんが、ご了承ください。

## 運命の出会い

「やつぱり、こいつ非日常って憧れるよなあ」

ベッドに寝転がりながら、漫画を読み進める。

「って、勉強の休憩で漫画読み始めたら、もう5冊も読み返してしまった。明日の小テストどうしようかなあ……、まといつか」

ハツと氣づくがもう遅い。

もうそろそろいつもなら寝る時間なので、寝てしまおう。  
と思い、ベッドに入ろうとした時だった……。

ドーン

「な、何だ!?」

大きな音に驚いて、辺りを見渡してみるも、何もない。

「かなりデカイ爆発音みたいのが聞こえた気がしたんだけじなあ  
少し気になりながらも、眠ることにした。

ドーン

「やつぱり、何がある……よな

一回も音を聞いたので、聞き間違いではないと確信する。

とりあえず外を見てみるか。  
と思い、窓から外の様子を確認する。

「喧嘩……こじひきやつあせだよな

家の前は公園になつてゐるが、その公園で女子と男が刀を持って喧嘩していた。

「警察に通報……いや、止めに行つた方がいいかな

念のために金属バットを持って行く。

夜の0時を回つていたので、家族は寝ていて、すんなり脱走でした。

「おー、何してるんだ

女子と男が俺の声に反応して、俺の方を見る。

「えつ、もしかして見えてるつて言つの?」

女子は癖のない肩まで伸びた茶色の髪に、大きく開いた翡翠色の目、さらにそれらを引き立てるかなり整つた容姿が特徴的だった。ただ…胸がないのが残念だ。

女子は俺のことを見るなり、驚愕の表情になる。

それとは逆に男は口元を吊り上げて、不気味な笑みを浮かべる。

「あぶない、逃げて!」

女子の声に反応するが、男は一瞬で俺の前まで詰めていた。

「なつ!?

分かつた時にはもう遅い。

殺される

そう思い、無意識に眼を閉じる。

自分に何かがかかるのを感じる。  
だが、自分の体に痛みは全くない。

恐る恐る眼を開き、何が起ったのかを理解する。

女の子が俺を庇つて斬られたのだ。

「な、んで？」

「勝手に…体…が動いた…つたのよ。それ…よつ、逃…げて」

所々途切れながらも、女の子は確実に伝える。

「バカヤロー、俺の代わりにやられた女の子を見捨てて逃げられる  
かよ」

「な…によ、それ。でも…、いいわ。…あ…んたが…戦い…なさい」

「分かった。でも、どうすればいい？」

女の子がニヤツと軽く笑うが、そんなどは気にならない。田の前で  
女の子が死に掛けているんだから。

「フル…時間…かせいでで」

『わかつた』

女の子が持っていた刀が輝き、光の粒子が集まって、犬のような姿になる。

散々驚きすぎて感覚が麻痺しているのか、俺はほとんど驚かなくなつていた。

フェルと呼ばれた犬はまっすぐ男に向かつていき、その周囲の温度が下がる。

男はフェルを殺そうと斬りかかるが、全て紙一重でかわされる。

「じゃあ、…今から…召喚の…儀式を…するわ

「召喚？…いつ…何を召喚するんだ？」

「悪魔よ」

その言葉を聞き、俺は言葉が出なかつた。宗教とかそんなものだらうと思ったが、この女の子が死に掛けの状況で「冗談が言えるほど、愉快な性格をしているようにも見えないのだ。

「そんなもの…どじから召喚するんだ？」

「ドジとは別の悪魔の世界。なら、そつと始めるわよ」

女の子の声が突然途切れ途切れから、ハツキリしたものになる。そこに多少の違和感を感じたが、今の状況ではどうでもいいことだらう。実際に目の前の女の子は血だらけなのだから。

「分かつた」

自分で思つが、どうしてこいつなつたのだらう。

自分が非日常を望んだからだらうか。

そうであつたなら取り消したい。

面倒なことに巻き込まれて死ぬのは嫌だ。

でも、自分を庇つて傷ついたこの子を今守れるだけの力は欲しい。

『我、世界を繋ぐ者。汝、我が呼びかけに答え、世界を渡れ』

女の子の目の前に光の粒子が現れ、一つに収束していく。

俺と女の子の目の前に現れたのは白い猫だった。

『俺を呼んだのは、お前か?』

『はい。でも、契約するのはコッチです』

女の子が俺を指差し、猫も俺の方を見る。

『何のために力を望む』

『…今、譲れるだけの力が欲しい』

俺がそう言つと、猫は軽く笑う。

『面白そうな奴だ。暇つぶしに契約してやる。右手を出せ』

恐る恐るながらも、言われた通りに右手を出す。

「おわつー。」

猫が再び光の粒子になり、それが右手の中指に収束し、光が收まればそこには金色の指輪がはまっていた。

「な、何で指輪が」

『これで契約は完了した。じゃあ、また変化するからな』

「えつー!？」

『聞き返した時にはすでに遅く、指輪がまた光り、細長い形になり、それを掴むと刀身が銀色の美しい刀になっていた。』

「もうシッコ!! はやめるから聞くけど、次はどうしたらいいの?』

『俺は悪魔だからな。人間の感情、想いを食つて力にする。お前の怒りや、恐怖と言った感情、誰かを護りたいといった強い想いを込めてみる。そしたら必ずと反応する』

言われた通りに、想いを込める。

自分を護つて傷ついた女の子を護りたいと思う強い想いを。

バチバチ

刀身に雷が走る。

「つおつー!」

突然のことだったので、声を上げて驚いてしまつ。

『小さな動作は俺がアシストしてやるから、叩きつぶしてこ。』

「分かった」

フェルと男が戦っているところまで一気に駆けていく。

「フェル、戻って！」

『了解』

女の子が右手を突き出すと、少し距離があつたが、フェルが粒子になり、女の子の指に銀色の指輪として収まる。

「おーりやあ」

剣道とかの心得はないので、刀を振っても完全な我流だ。  
我流ゆえに相手にかわされてしまう。

『想いを込めて、『雷閃』って叫べ』

「くつそつ、『雷閃』」

横に振った刀はまたしても男に当たることはない。

だが、先ほどとは違う結果があった。

刀の軌道上から雷の斬撃が飛び出し、男は持っていた刀で防御しようとすると、その防御を通り抜けて、その胴体を真つ二つにしてしまつ。

「お、俺、人、殺しちまつた  
予想外の結果に慌ててしまつ。

男は俺を殺そうとしてた。

殺さなかつたら殺されてたかもしれない。

でも、殺すことを前提にした攻撃をするのと、殺さないと思つて攻撃して結果殺したのとでは、精神的にずいぶん違う。

「やつたのね」

女の子が俺の方へ駆け寄つてくる。  
だが、さつきと少し違う。

「あつ、怪我が無くなつてゐる」

「ああ、それならもう治療したから大丈夫」

いつたい何のために戦つていたのだろう。

「じゃあ、怪我もないなら、俺はもう帰るから」

じゃあ、と言つて立ち去ろうとする。

「ちょっと待つた！」

「な、何？」

嫌な予感がしたので、恐る恐る聞いてみると、やはり嫌な予感は的中していた。

「あんた、あたしのパートナーにならない?」

「はあー?」

俺の意識はそこで途切れてしまつたのだった。

最後に思ったことは、何だ夢か。だ。

だが、今日と書つ口がこれから運命を変えてしまつたことには、まだこのときは知る由もなかつた。

## 運命の出来事（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

「やつぱり夢か」

俺はベッドから起きると共に、大きく伸びをすると、思いがけない声がかけられる。

『やつと起きたか。そつこや面白紹介がまだだつたな。俺はベンケレ。お前は?』

『じゅあ長いからペケな。俺は高橋雷斗。<sup>たかはじらごと</sup>つてか、何でいんの?』

ペケは一瞬呆れ顔になりながらも続ける。

『まあ好きに呼べばいい。俺はライトって呼ぶからな。何で居るかつて、そりや、契約したからに決まつてるだろ』

「やつぱり夢じやなかつたんだな」

『まあ、俺がここにいるのが証明だしな』

何か目の前にいる猫に偉そうにされると、イラッとするなあ。

「何で指輪じやないんだ?」

『戦う時はイメージ通りの武器になるし、人が多ことこのでは指輪、人がいなかつたら、この姿になるからよしへな』

「何か…悪魔つて自由だな

ペケは、何も分かつてないのかとも言いたげな田で俺を見てくる。

『俺は悪魔じゃないんだから、知る由もないだろ。アリビ』。

『いいか、悪魔ってのは我慢することがない。言わば、欲に忠実に生きてるんだ。何故自由のかつて聞くのは、太陽って何故東から昇るのがぐらい常識だぞ』

「ああ、それは…悪かった」

『分かればいいんだよ。それより腹減ったから、何かくれよ』

『俺も腹減ったけど、キャットフードとか無えしなあ。ペケは好きな食べ物とかあるのか?』

ペケは考えるような仕草をしてから、思いついたように答える。

『ワインナー。あと俺は猫じゃない、虎だ』

『お~ペケ、魚と思わせての、猫がワインナーってのは百歩譲つて良じとしよう。だが、虎と听つには無理があるぞ』

『俺はホワイトタイガーがモデルだ! デカいと不便だから、小さくしたんだよ』

俺は信じられないと言いたげな視線をペケに送り続ける。

『もついい。とつあえずワインナーくれよ』

「分かつたから、機嫌直せよ」

『ふん』

『ここが学校か』

ペケは指輪になつていて、頭の中に直接語りかけてくる。

「猫になつたらペケは追い出されるから、絶対そのまままでいよ」

『つむ、あえてやつてみたい気がするぞ』

「絶対、猫になんなよ」

『それは振りか?』

「ちづえーよ!」

1人で喋つてゐるからか、廊下を歩いてゐる他の生徒から避けられていた。

「お前のせいだからな。今日はウインナー抜きだな」

『それは勘弁してくれ!』

ペケの必死の願いに、つい許してしまつた。

「では、突然だが今日は転校生の紹介をする」

ふーん、転校生とか関係ないな。  
どうせ、喋る気ないし。  
挨拶もスルーだな。

「高橋氷華です。そこにいる、雷斗の従兄妹です。よろしくお願ひします」

ガタン

「おーい、高橋大丈夫か？」

あまりの不意打ちに驚きすぎて、椅子から転げてしまった。  
こんなの、今時じゃ『新婚さんいらっしゃい』でしか見れないぞ。

「あっ、はい。大丈夫です」

言いながら、氷華と名乗った女の子を見ると、全てを思い出す。  
あつ、記憶喪失設定とかなかつたからね？

昨日、公園で会つて、俺を非日常に連れ込んだ張本人だった。

「雷斗、昨日はありがとね。いろいろと」

含みある笑顔で言つ氷華から、一瞬で俺にクラス中の視線が刺さる。  
主に男子は、このままじゃ視線だけでなく、別の金属体で刺されそ

うな気もある。

「転校生のあの子と、どういう関係か、嘘偽りなく正直に答へる。場合によつては…分かつてゐるな?」

話しかけてきたのは、後ろの席の重吾だ。席が前後なので仲良くなつた。

「別に、どんな関係でもない」

はずだ。俺の記憶の中では、何もなかつた。

「雷斗はそんなこと言つんだ。あたし達、一生共に寄り添つ仲じゃない。昨日の夜は遊びだつたの!?」

女子がコソコソと話し始め、男子はよく分からぬ言葉を叫んでから、視線だけで人が殺せそうなぐらいい睨んでくる。

「なつ!?.俺はそんなこと知らねえぞ」

「知らないこつて……、あの子はどつなるつて言つたの?..まだみんなに小さこにこ……」

クラスからの視線が先ほどよりも厳しくなる。

今の心境だけで自殺ものだな。

「冗談よ」

軽く笑いながら氷華は言つたが、俺の中では[冗談のレベルを越えていた。  
できれば一度と関わりたくない。

「でも、従兄妹つてのは本当。下宿先の家に行つてみたら、あんたの家だつたから焦つたわ」

そう言つう氷華は全くそんな表情ではない。

おそらくは、俺の家に住むつてのは本当だらう。

「あんの糞親が」

こんな存在自体が悪魔みたいな奴が住むのわ承認したとは許すまじ。

「まあまあ、良い両親じゃない」

そう言つて氷華が座るのは、俺の斜め後ろで重吾の隣だつた。

そして、何も言わなくとも分かつてしまつた。

氷華がいる日常は、それだけで全て非日常に変わつてしまつと言つことに。

## 転校生（後書き）

今日、もう一話投稿予定です。

予定では20時ぐらいに

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。  
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7417z/>

---

雷氷の悪魔祓い

2011年12月25日15時52分発行